

八風山西南麓における旧石器時代遺跡の立地傾向の予察

国武貞克・須藤隆司・中村由克

八風山西南麓における旧石器時代遺跡の立地傾向の予察

国武貞克^{1*}・須藤隆司²・中村由克²

要 旨

香坂山遺跡の範囲確認調査を通じて、八風山西南麓における遺跡立地の傾向を検討した。深い谷が発達する八風山山麓においては、遺跡が形成される平坦面が成立する要件が尾根の鞍部である。尾根鞍部に立地する代表格として香坂山遺跡が挙げられ、それよりも規模が小さいが八風山Ⅱ遺跡も同様である。一方で山中であるため標高差が大きく、段丘平坦面や尾根緩斜面上にも流路が形成されている。この流路により、基盤の礫層が開析され露出した原石が遺跡形成の要因になったのが下茂内遺跡であり、八風山Ⅵ遺跡も同様の立地である。このように香坂山型と下茂内型と仮称する立地傾向により、八風山西南麓に形成された旧石器時代3遺跡の立地傾向を統一的な観点から理解できそうである。今後の野外調査で検証していく必要があるだろう。

キーワード：香坂山遺跡、下茂内遺跡、八風山遺跡群、尾根上鞍部、礫層

1. はじめに

日本列島の石刃の起源を解明するため、長野県佐久市の香坂山遺跡の学術目的の発掘調査を2020年から実施してきた。1997年長野県調査区（谷編2001）の西側で2020年8月から9月に実施した3次にわたる発掘調査（国武編2021）により、大型石刃を含む石器包含層を発見し、大型石刃と小石刃、尖頭形剥片を組成するこれまで知られていない未知のインダストリーの存在を明らかにした（国武他2021）。このインダストリーは年代測定により列島最古の石刃石器群であり、技術組成からユーラシア大陸の初期後期旧石器時代（IUP）石器群の系譜にあることを指摘した（国武他2022b）。2021年8月には第4次調査として遺跡の中心と予測した国有保安林の範囲を広く発掘し（国武2022）、本研究の目的としてきた大型石刃製作跡を完全に検出した（国武他2022a）。そして2021年9月と2022年9月、2023年11月にはこのような成果の上昇した遺跡の中心部を離れて、それぞれ第5～7次調査として同様の時期の石器包含層が他に形成さ

れていないか、周辺の尾根の平坦面を選んで合計30か所で試掘調査を行った。小稿ではその結果を通じて得られた八風山における旧石器時代遺跡の立地傾向についての予察を述べるものである。

2. 八風山西南麓の地質と石器石材分布

香坂山遺跡の所在する八風山西南麓の標高約1,000m以上の東半部は基盤をなす鮮新世の火砕性碎屑物からなる兜岩層が露出する（近藤・小林編1992）。それを構成する集塊質安山岩層に含まれる輝石安山岩が遺跡直下の沢に露出しており、その亜円礫は第4次調査において検出した礫群構成礫として利用されていたと推定される。石器石材に利用された黒色ガラス質安山岩は、八風山山頂付近を構成する水落観音沢層の安山岩質溶岩に由来するとされているが現在露頭はなく（近藤・小林編1992）、そこから剥落、崩落して、八風山南麓の標高1,070mから900mの緩斜面上に堆積している（須藤編1999）。その分布の北側に位置する尾根上において

1 奈良文化財研究所 〒630-8577 奈良市二条町2-9-1

2 明治大学黒耀石研究センター 〒386-0601 長野県小県郡長和町大門3670-8

* 責任著者 国武貞克 (kunitakesadakatsu@gmail.com)

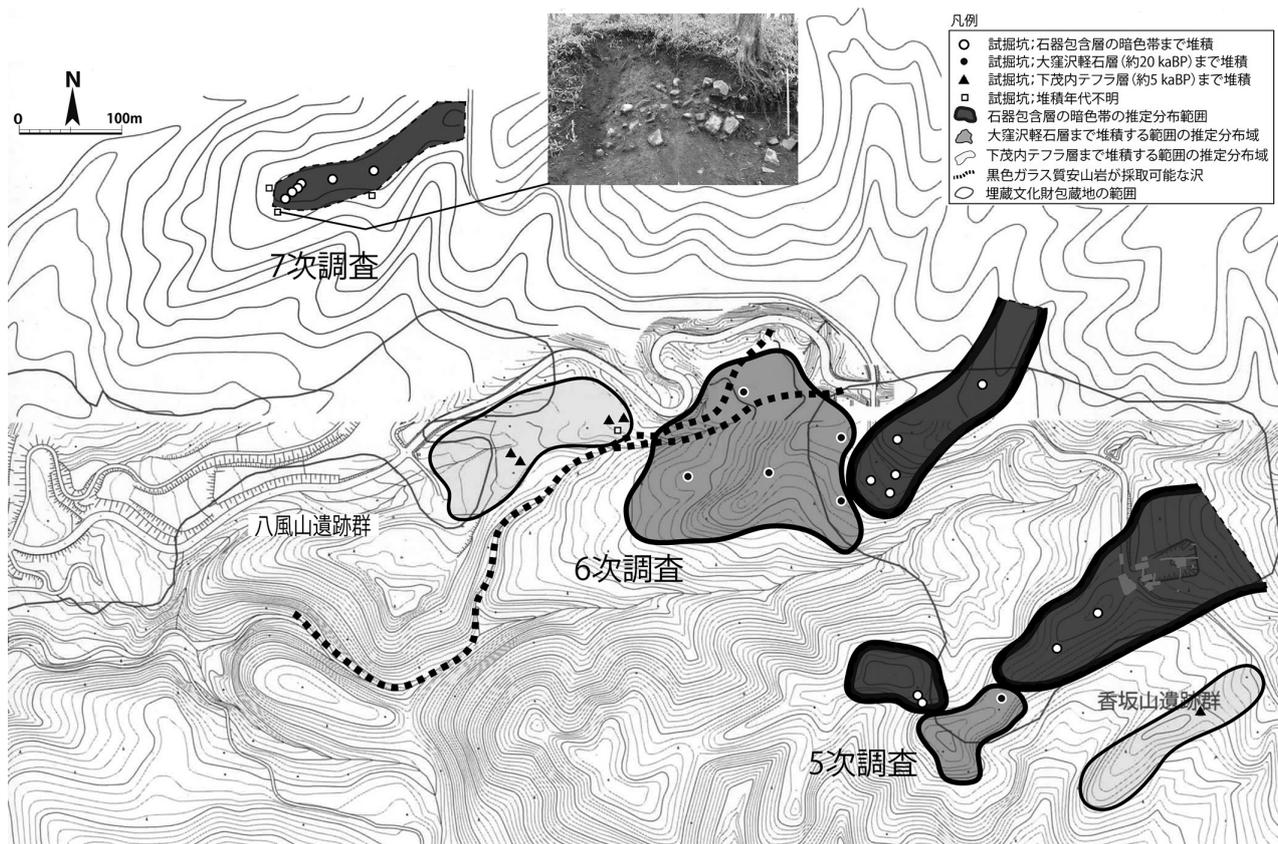


図1 香坂山遺跡周辺における範囲確認調査地点 (石器包含層の暗色帯は香坂山遺跡4次調査17層 (国武2022))

第7次調査で原石を包含する崩落土層を検出した(図1写真)。そのため最も標高の高い原石分布地点は標高1,120mとなり、本来の露頭に最も近い原石散布地となる(図1)。尾根の下の土流堆積物に包含される黑色ガラス質安山岩が表層水により露出し、その利用に伴って形成されたのが原産地遺跡としての八風山遺跡群である(須藤編1999)。つまり現在みられる原石散布範囲は、その範囲を開析する沢によって原石の存在が明らかになった範囲であり、それは八風山遺跡群と重なっている。これに対して香坂山遺跡は、その黑色ガラス質安山岩の散布範囲から約600m離れている。

3. 香坂山遺跡の範囲確認調査

2021年9月に実施した第5次調査では、香坂山遺跡の中心部が確認されている標高1,140mの東西方向にのびる太い尾根上の3か所の平坦面において6か所の調査区を設定した(図1)。その結果、香坂山遺跡と同時期

の石器包含層は確認できなかった。2022年9月に実施した第6次調査では、先述した黑色ガラス質安山岩の分布の南西端で、石材が採取可能な沢のうち最も香坂山遺跡に近い沢に面した尾根の平坦面で15か所の調査区を設定した(図1)。石器石材の採取に伴う粗割等の一次処理の作業地点を想定したのである。しかしながら予想に反して香坂山遺跡と同時期の石器包含層は確認できなかった。2023年11月に実施した第7次調査では八風山II遺跡の北方の尾根平坦面に9か所の試掘坑を設けたが1か所も石器が出土しなかった。

第5～7次調査により、合計30か所の試掘を行い、15か所で香坂山遺跡の石器包含層である暗色帯まで堆積し、6か所が約21kaBPの大窪沢軽石層群(近藤・小林編1992)まで堆積し、5か所が約5kaBPの下茂内テフラ(近藤・小林編1992)まで堆積し、4か所が堆積年代が不明であった(図1)。地形面は、尾根の鞍部が9か所、頂部が1か所、緩斜面18か所、張出部2か所であるが、堆積層との相関はみられない。むしろ標高と相関しており、標高1,110m以上では、17か所中15か所

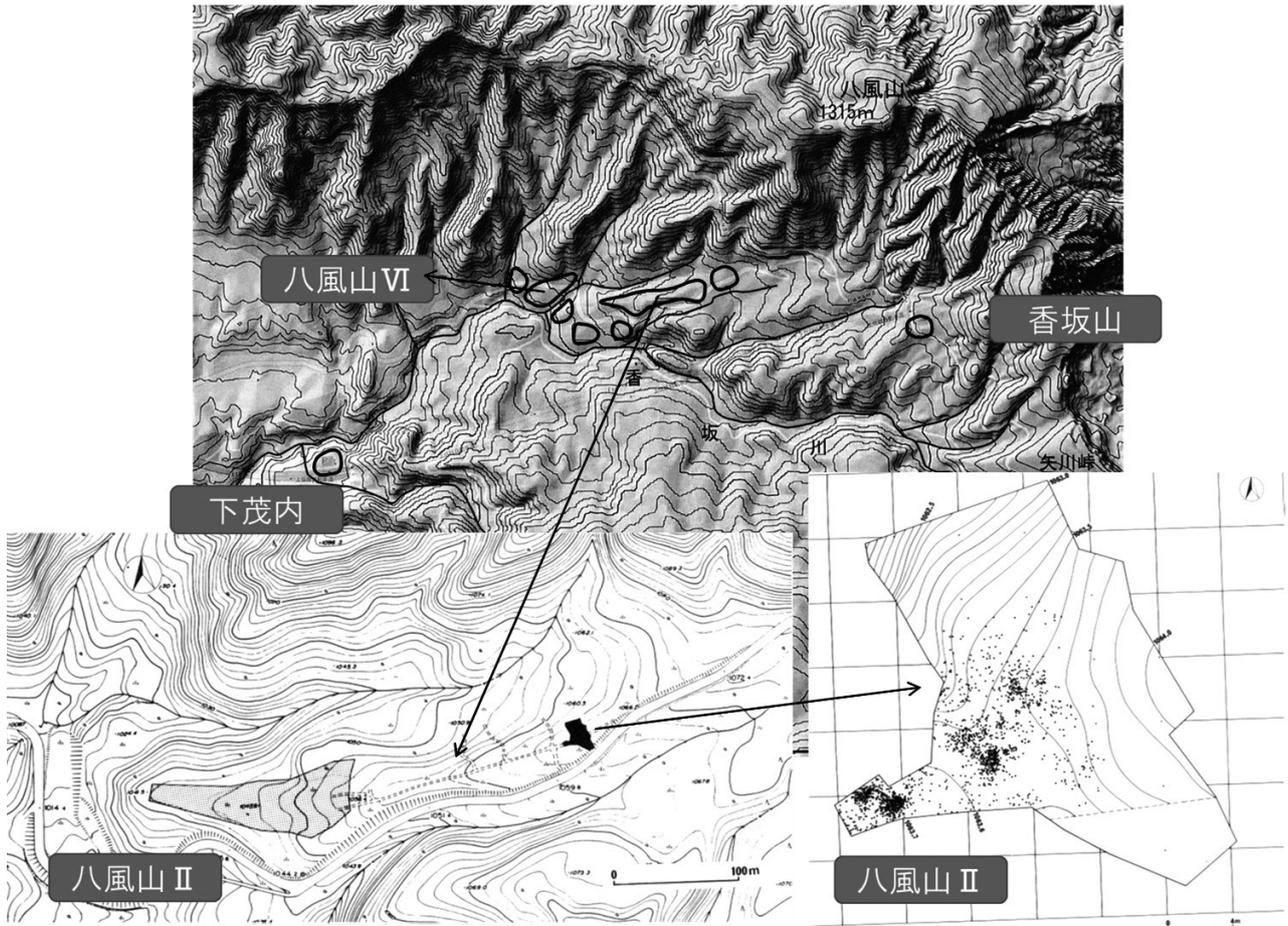


図2 香坂山遺跡と八風山II遺跡の立地

で石器包含層の暗色帯まで堆積していた。それ以下では大窪沢軽石層までで、1,080m以下ではすべて下茂内テフラまでの堆積となった(図1)。

4. 香坂山型の立地傾向

香坂山遺跡の立地は、八風山の主稜線の標高1260mのピークから南西方向に標高1,140mまで斜面全体が傾斜し、標高1,140mを維持して西方向に幅約50mでのびる尾根の付け根の鞍部である(図2)。その南北に浅く入る谷が迫る鞍部の中央に遺跡の中心が立地する。周辺の尾根を30か所試掘した結果、このような形状の地形面では最大幅で最標高地点に位置しているのが香坂山遺跡の鞍部であった。尾根上鞍部に立地する傾向を香坂山型と仮称する。

5. 下茂内型の立地傾向

一方で段丘上の下茂内遺跡の立地は異なっている(近藤・小林編1992)。最終氷期に斜面から谷底に活発に崩落して堆積した礫層により形成された標高約915mの平坦面が離水し、礫層上面には石器石材となる黒色ガラス質安山岩原石が含まれる状態であった。離水直後で、平坦面上には香坂川と並行した分流路がその面を開析し、その水流により石器原石が露出した。その原石を採取して、沢の傍で石槍が製作されて残されたのが第2文化層である。

その後大窪沢第2軽石(As-OK2)が堆積し、その上位でも同様に流路が形成され、原石が露出した別の沢の傍で旧石器時代終末期に再び大型石槍の製作跡が形成された。これが第1文化層である(図3)。

香坂山遺跡の第5、6次調査で21か所試掘した結果、

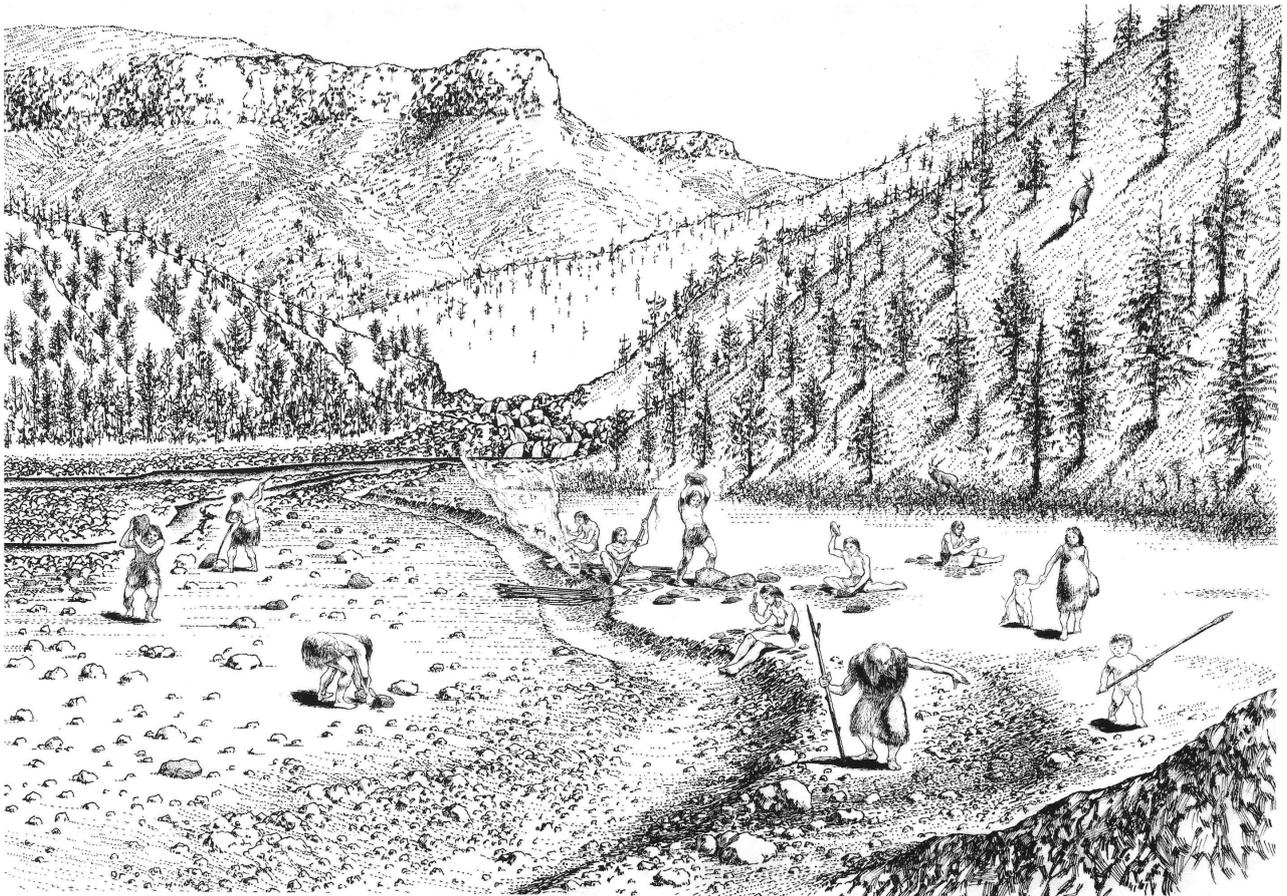


図3 下茂内遺跡の景観 (近藤・小林編1992)

尾根の緩斜面において大窪沢軽石層までの堆積がみられる地点の全てにおいて、下茂内遺跡と同様に、その直下は礫を多含する斜面堆積物であった。違いは石器石材に利用可能な黒色ガラス質安山岩が含まれていなかった点である。

八風山山麓斜面では、このような大窪沢軽石層以下が斜面堆積物になる地形、つまり最終氷期に斜面が崩れて安定していない範囲が広く分布していたことが推定される。段丘上を流れる沢が基盤礫層中の石器石材原石を洗い出して、それに起因して立地する傾向を下茂内型と仮称しておく。

6. 八風山遺跡群の構成

黒色ガラス質安山岩の原石散布地の真上に展開する八風山遺跡群（須藤編前掲）の遺跡立地は、まさにこの両者の傾向がみられる。まず香坂山遺跡と同様に 36ka



図4 八風山VI遺跡B地点全景 (須藤編1999)

cal BP を遡る石刃製作地点である八風山II遺跡は、標高 1,074m から 1,063m まで斜面となり、標高 1,063m を維持して鞍部となった幅約 7m の尾根上である（図2）。その鞍部の南北には浅い谷が入っている。まさに香坂山型の立地傾向である。ただし、石材は基盤の土石流堆積物に含まれる原石や直近の沢から採取していたものと考えられこの点は香坂山遺跡とは異なっている。

これに対して、浅間板鼻黄色軽石（As-YP）上位の大型石槍製作跡である八風山Ⅵ遺跡では、香坂川とは約10mの比高をもつ尾根上の緩斜面上において、香坂川に向かう浅い流路が基盤礫層を開析し露出した原石が利用されている（図4）。まさに下茂内型の立地傾向である。

7. まとめ

このように、後期旧石器時代初頭の石刃製作跡は浅い谷に挟まれた尾根の鞍部に形成され（香坂山型）、後期旧石器時代後半期及び終末期の石槍製作跡は、基盤礫層を開析する沢の周辺に形成された（下茂内型）。八風山山麓でこれまで見つかった旧石器時代遺跡を総合すると、現状では以上のような遺跡立地の傾向により統一的に理解することが出来そうである。この見通しを検証するため、さらなる野外調査に基づく検討が必要である。

引用文献

- 近藤尚義・小林秀幸編1992『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書下茂内遺跡』, 257p., 長野, 長野県埋蔵文化財センター
- 国武貞克・須藤隆司・堤隆 2021「日本列島最古の石刃石器群の構成とその起源」『旧石器研究』17: 125-146
- 国武貞克・須藤隆司・中村由克 2022a「香坂山遺跡の立地と遺跡構造」『旧石器研究』18: 101-111
- 国武貞克・國木田大・佐藤宏之 2022b「石刃石器群の起源からみた日本列島における後期旧石器文化の成立」『考古学研究』274: 56-73
- 国武貞克編 2021『中央アジア旧石器研究報告第7冊 香坂山遺跡2020年発掘調査成果報告書』, 205p., 奈良, 奈良文化財研究所
- 国武貞克 2022『中央アジア旧石器研究報告第8冊 香坂山遺跡2021年発掘調査成果報告書』, 290p., 奈良, 奈良文化財研究所
- 須藤隆司編 1999『ガラス質黒色安山岩原産地遺跡群 八風山遺跡群』, 619p., 佐久, 交栄興産・佐久市教育委員会
- 谷和隆編 2001『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 29 香坂山遺跡』, 72p., 長野, 長野県埋蔵文化財センター

Prospects for the likelihood of the Palaeolithic site locations on Happusan mountain

Sadakatsu Kunitake ^{1*}, Takashi Suto ², Yoshikatsu Nakamura ²

Abstract

Based on the results of an investigation at the Kousakayama site, we examined the likelihood of Paleolithic site locations on Happusan mountain. The Kousakayama site is located in the saddle between small rises on a wide ridge. In the Happusan site cluster, Happusan II exhibited the same topography. However, the Shimomouchi site is located in shallow streams where raw materials are exposed to water flows. In the Happusan site cluster, site VI exhibited the same topography. Therefore, these two types of site locations—the Kousakayama and Shimomouchi types—could aid understanding the locations of the three Paleolithic sites on Happusan mountain.

Keywords: Kousakayama site, Shimomouchi site, Happusan site cluster, ridge saddle, grave layers

(Received 1 December 2023 / Accepted 19 January 2024)

¹ Nara National Research Institute for Culultural Properties, 2-9-1 Nijo-cho, Nara-shi., 630-8577, Japan

² Center for Obsidian and Lithic Studies, Meiji University, 3670-8 Daimon, Nagawa-cho, Chiisagata-gun, Nagano, 386-0601, Japan

* Corresponding author: Sadakatsu Kunitake (kunitakesadakatsu@gmail.com)